

バーバラ・ウィルソン 著，鎌倉矩子・山崎せつ子 訳
事例でみる神経心理学的リハビリテーション
藤田郁代（国際医療福祉大学言語聴覚学科，言語聴覚士）

著者のバーバラ・ウィルソンは英国の高名な神経心理学者であり，本邦でも「The Rivermead 行動記憶検査」および「BIT 行動性無視検査」を通じてなじみの深い方も多いであろう。

神経心理学は医学，認知科学，心理学，言語病理学，作業療法学等からの学際的研究が重要な位置を占める学問領域である。著者の学問的背景は心理学にあり，詳細な症状記述と行動変化の過程の分析にその特徴を見てとることができる。特に，各種の神経心理学的症状にリハビリテーションを行い，その効果を人生の質（QOL）の面から長期に渡り追跡し，記述した書としては他に類を見ないといってよいであろう。

本書では著者が約 20 年の間に出会い，リハビリテーションを行った 600 人以上の脳損傷患者の中から特に多くのことを教えてくれた 20 人が取り上げられている。症状としては記憶障害，失語，失読，失認，視空間無視等を呈した者である。これらの者は治療期間だけでなく治療後も長期的にフォローアップされ，また本書を著すにあたってインタ

ビューも試みられており，その障害が彼らの生活にどのように作用し，著者の治療的介入がその後の人生にどのような変化をもたらしたかが詳しく記述されている。

著者は，リハビリテーションの本質は障害をもつ人間を理解し，生活場面においてその人が遭遇する諸問題を軽減することにあると考え，神経心理学的手法の効用と限界について検証を試みている。そして，神経心理学的検査は機能障害の全体像を把握するには役立つが，能力障害に対し治療計画を立てその効果を測る手段としては限界があると指摘している。また，一貫して，治療に「試すことなしには，人はあるものが治療に反応するかしないかを知ることはない」という姿勢で臨んでおり，エラーレス学習，アンカーポイント，音韻的アプローチ等が発見されたくだりが詳しく描かれている。

翻訳はよくこなれており，大変読みやすい。脳損傷のリハビリテーションに関わるすべての専門職に推奨したい本である。

（B5 判 頁 384 5,600 円＋税 2003 三輪書店 刊）